

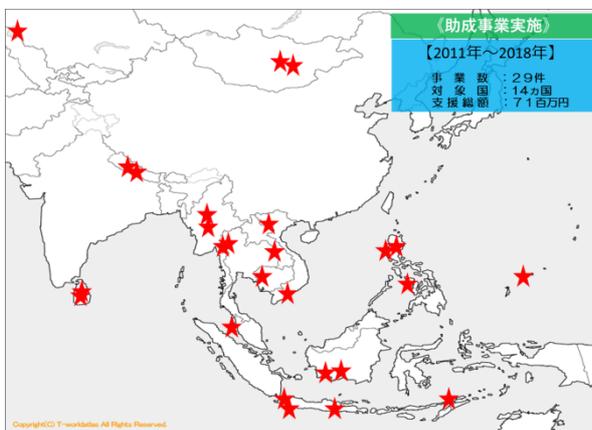
「開会のごあいさつ」

公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団 理事長

池田 博之

皆さん こんにちは。りそなアジア・オセアニア財団理事長の池田でございます。本日はお忙しい中、当財団の環境シンポジウム「SDGs対話～新たなコレボレーションを求めて」にご出席下さいまして、誠に有難うございます。主催者を代表しまして、本シンポジウムの開催趣旨を、ご説明させていただきます。

私ども財団は2011年より、アジア・オセアニアにおける「水」と「緑」をテーマとした自然環境の保護や整備活動を行っている方に対して、「助成」という形で事業活動へ支援を行っております。支援する事業活動は、ただ物を与えるだけの活動ではなく、「創意」と「工夫」を活かして現地の方を巻き込み、現地の方々が自律的かつ持続的に環境保全へ取り組んでいけるような活動を選定しております。



これまでの事業地域をプロットした図をスクリーンに映しております。現在迄8年間で14ヶ国、29件の事業へ、総額71百万円支援してきました。

事業は具体的にどのようなものか、いくつかご紹介させていただきます。



こちらはボルネオ島で森林火災から森を守る活動です。この森は以前オラウータンの生息地でしたが、パームプランテーション開発で森が減少し、オランウータンは今近絶滅種となっているようです。



これは、20世紀最大の環境変化と言われる面積が10分の1に減少したアラル海において、湖底砂漠化した地へ緑を再生しようと一人で挑戦している研究者の活動です。このようなパイロット的の事業へも支援しています。



こちらは北部タイのトウモロコシの残渣を活用した有機農業を実践する、現地チェンマイ大学との共同事業です。



今年、事業視察しました写真をご紹介します。これはインドネシアジャワ島東部スラバヤ近郊のエビ養殖地のゴミ問題解決に向けて、村が一体となって成果を収めた事業です。村人に集まっていただき、事業の説明を受けました。現在もその活動は継続されています。



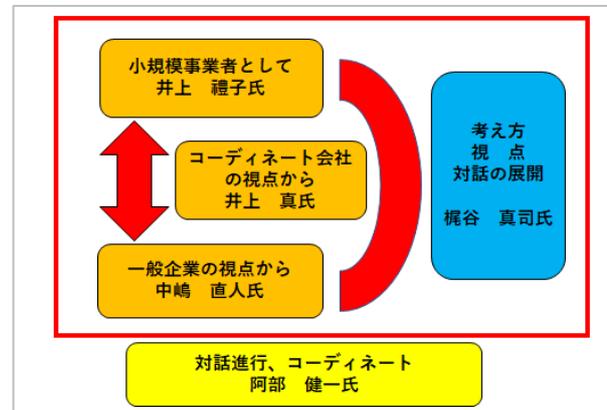
次の写真は、アジア最貧国の一つである東ティモールでのコーヒー栽培地を訪れた写真です。日本のNGOが栽培を指導して、フェアトレードにより生計維持へのサポートをしています。本日休憩時間にお出しするコーヒーは、この東ティモールのものです。以上私どもの支援する環境事業のイメージを掴んでいただきましたでしょうか。



さて、本日のテーマであります「SDGs」ですけれども、私

どもの環境事業は水と緑を守る活動として、SDGsが目指す17のゴールのうち、No.6「安全な水とトイレを世界中に」、No.14の「海の豊かさを守ろう」、No.15の「陸の豊かさを守ろう」の何れかを目指す活動が中心となっており、活動者されているのは、NPO/NGO 団体所属の方や大学の研究者など非営利活動者や団体の方々です。

活動はそれぞれ現地で成果を上げておりますが、一方で、活動されている方の中から、活動を自立的かつ持続的なものにするためには、専門分野でノウハウを持つ一般企業の協力を得たい、力を借りたいという意見が数多く寄せられました。詳しく聞いてみると、一般企業との接点がほとんど無いとのことでした。本来SDGsの達成へ向け、組織などの壁を超えて力を併せて取組まなければならないところ、残念ながら我が国の状況はそうならないと言えます。



そこで本日は、NPO/NGOなど非営利活動団体と営利企業という対極の位置にあるこの両者が、同じSDGsのゴールを目指してどのように協働していくかをテーマとして取り上げました。このテーマの議論にあたり、ご案内のとおり多彩な顔ぶれの方々にお越しいただいています。登壇者の皆さまへは、こちらの図にありますキャストイングで、夫々の立場や視点から講演をいただき、最後は全員「対話」の場でより深く考えをお伺いすることで、新たな発見や気づきを感じていただきたいと思っております。登壇者の皆さま、宜しくお願ひ致します。

最後になりましたが、本日のシンポジウム開催にあたりご協力賜りました、共催団体である大阪府様、大阪府様、大阪商工会議所様、関西経済連合会様、大阪産業局様、後援団体である日本貿易振興機構大阪本部様、国際協力機構関西センター様、りそな銀行様、関西みらいフィナンシャルグループ様、りそな総合研究所様、関西SDGsプラットフォーム様、産経新聞大阪本社様に、深く御礼申し上げます。

それでは、本シンポジウムにより、今後NPO/NGOと一般企業の連携が進んでいくことを期待致しまして、冒頭の説明とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。